

説教 『本当の裁判』 ルカによる福音書 22 : 66-71 2017. 1. 15

今日お読みいただいた聖書の箇所は、イエスが十字架にかけられる前に裁判にかけられたその場面です。ここでのやり取りは、話が全くかみ合っていないことにお気づきでしょうか。イエスは質問を受けます。「お前がメシアなら、そうだとするがよい。」メシアというのは、「救い主」、「救世主」という意味で、王様や皇帝のことを指していました。ですからイエスが「わたしはメシアだ」といえば、王や皇帝に刃向う者として反逆罪に問える、そうすれば死刑にすることができます。実はこの時、支配者たちはイエスを死刑にすることをすでに決めていました。ですから、この裁判は、一応の形をつけるためのものに過ぎませんでした。

これに対してイエス様の答えは、「わたしが言っても、あなたたちは決して信じないだろう。わたしが尋ねても、決して答えないだろう。」というものでした。ここでのイエス様の返答は、自分がかけられている裁判で無罪になろうとしているのでもなければ、有罪は仕方ないと覚悟を決めたセリフでもありません。イエス様の関心は、自分のことではなく、自分を裁判にかけている人々のことです。「信じてほしい。答えてほしい。でもそうはしないだろう。」というイエス様の嘆きです。イエス様はこの人々を信仰へと導き救いたいのです。

ここには目に見えないもう一つの法廷が出現しています。神の前に立たされているユダヤの指導者たち、彼らが被告となり、断罪されている法廷です。このいわば天上の法廷で、判決が下されます。つまり、病人を癒し悩む者を慰め力づけてきたイエスを無実の罪で殺してしまう罪と不信仰が暴き出されます。「あなた方は信じない。招きに答えない。」しかしそこで言い渡される刑罰は、何だったのでしょうか。普通なら、滅びとか、地獄行きとかでしょうが、違っていました。「今から後、人の子は全能の神の右に座る。」「人の子」というのは旧約聖書で預言されたメシアのことで（ダニエル 7:13）、イエス様のご自分のことを言っていて、メシアの支配がはじまるという意味なのですが、ここで暗示されているのは十字架にかけられるということです（ルカ 9:51 ; ヨハネ 12:32,14:1-3 他）。つまり十字架によってメシアの支配がはじまるということ、もっと言えば、人々の罪の刑の執行を、メシアご自身が受けるということです。人々の罪をご自分の罪とされたということです。「あなた方には罪がある。しかし、今から私はあなた方を救いに行く。」ただし、このことはまだ人々には隠されています。

このイエス様の答えに対して、ユダヤの当局者たちは有罪とするに足る明確な返答を得られませんでした。そこで言質を得るためにさらに問います。「では、お前は神の子か」、イエスかノーで応えよと言うわけですが。この後のイエスの言葉に対して、71 節では「本人の口から聞いた」として有罪を決定しました。「ああ、言った、言った」という訳です。これで冒涇罪・反逆罪で、ローマに訴えることができる。（当時、死刑などの重罪の判決は帝国の裁判が必要でした。）ところが実際にイエス様のおっしゃった言葉は、そのような証拠

となるものではありませんでした。「そのとおりである。」と答えたわけではありません。では何とお答えになったのか、70節後半を見てみましょう。

「わたしがそうだとはい、あなたたちが言っている。」これは何とも見当違いな返事ではないでしょうか。民の支配者たちは、イエスを信じていませんから、当然イエスを神の子とは言っていない。なのに「あなたたちが言っている」とは…。支配者たちはイエスが言っていないことを言ったと言うのとおなじように、イエスも支配者たちが言っていないことを言ったということです。これは一体どうしたことでしょうか。

この謎を解くには、ここには第二の法廷、天上の法廷があるということがヒントです。旧約聖書以来の伝統に、神は人間の心を見通す、人間が自分自身にさえ隠しておく秘密すら神には隠れることができないという考えがあります（サムエル上 16:7; 詩 44:22; 69:6; 139:1-24, 他）。そしてもう一つ、人間は何が善であるか、何が真理であるか、何が神のみ心であるかを本当は知っている、という考え方があります（ローマ 1:18 以下, 他）。知っていながらできない…そこに罪があるのです。ローマの信徒への手紙で彼を書いたパウロという人は次のように言っています。「善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです」（ローマ 7:18, 他）。実際、律法学者たちの中には、イエス様と論争するうちに、イエス様の正しさが分かって「先生、立派なお答えです」と言う者も出てきたのです（20:39）。そしてイエス様の正しさの前に彼らは完全に沈黙してしまいました（20:40）。天の法廷において、心の中を見通す神様の前で、本当はイエスがメシアであるということを知りながら、それでもそれに逆らいイエスを殺そうとしているという、自己矛盾、罪、そして結果、地獄の苦悩に陥らざるを得ない人々の惨めさが暴きだされています。

「わたしがそうだとはい、あなたたちが言っている。」これは大変恐ろしい言葉ではないでしょうか。お前たちは善を知っていながら悪を行っている。知らずに犯した罪ではないということです。罪と知りつつ罪を犯す。これほど恐ろしい断崖はありません。それでも判決文に書かれた刑罰は、イエスが上げられること、十字架でした。

人間の心は複雑です。天使のような心があれば悪魔も宿っている。この私たちに対して、悪魔の心があるからダメとは言わず、それでも真実を感じている部分に注目してくださるということは一つの救いです。これは単なる裁きの言葉ではないのです。天上の法廷で、私たちを糾弾する言葉でありながら、同時に、弁護してくださるイエス様の言葉です。わたしたちの悪魔的な部分、これについては十字架で対処して下さり、私たちの中の微かな善良さについては、これを信じていてくださるのです。